

日二月五自 日七月五至	日五廿月四至 日十三月四自	日八十月四自 日三十月四至
旬節午端	招魂祭 天長節	び遊とごまま
のらら園ては古 前べ棚に男武へ に生をの者より 集花拵も子人形 ひ供ら幼供のな よ物へ兒ををの ろをそ等祝ふ棚 こをなして共飾 び終武事につ の中り者語ら に會お人形ひ 食をなが	ふと其の士實ら幼様い思 く其の靈のにしなも日ひ浮 共の事祭を御にわな何てし にの事祭を國のをわな何し 感謝の知るの爲をわな何し の念をしめ日めに盡さし 念を忠ある幼れし忠義の を義の念に兒し忠義の念を 養念の念に兒し忠義の念を	飯事遊び程幼兒の好むものはない 終日なしてもまだあきたらぬ位で ある 其の遊びの内何ともいへぬ親しみ を得しめ暖かき心を養ひ社會生活 の幾分を模倣をなさしめる 「材料は郊外保育の際に集める」
形武職つ毛お 者人ば虫茶	飾町の装	ご野ほたん具臺蜂 いちんぼ所用
庭園	花岡山	御幸坂
軒と雀	招魂祭	指太郎櫻
鯉 牛 金 若 太 丸 郎 同上 同上	鯉 三匹の豚 轆 轆 同上 同上	可愛らし いお客様 左様なら 同上
同上	手拍子 「律動」	同上
「豆細工」 「風車」	「豆細工」 「旗」	「首錦」 花びらつ なびらつ 「摺紙」 「花籠」 「粘土」 自由製作 飯事用 「自由書」 自由書
來なかつ	式取止め	け之花岡山 に花岡山 料集めた

月五自 月五至	日六十月五自 日一廿月五至	日四十月五至 日九月五自	郊	(車電に重)び遊物乗	會 動 運	「會食」
幼も緑 兒ない の相した 互のい 親る し葉 し蔭 み景 もの色 の深も かた くなと へ様	めしそ出るさちる乗 たいさそ來ものぞが事運 いさうて來るのも満がいの動 ち大てるの運足ない會 に人であの運する其の折 模もらう轉手やお事の興 傲及うてあ轉手やお事の興 創ば切符客に電車遊つた 作ぬ遊もにう車掌なる忘 念びお金も出せは をが出も出せは 養來も出せは し樂し	も青の運常てさかからか運 なり健動な山く運のべ、動 又山全をな崎小動のの會 經白をはしこ學靴をを好 驗の鶴のかり知び校をは考 も悉たいずある合、うかへ なる幼あ、の、まか、るば の兒の、の、まか、るば の清此際、す水は動 の觀大、事、前、着、服 察心、に、大、前、着、服 と水、に、心、に、寺、を、し と身、に、心、に、寺、を、し	山、田、 川、畑 師、花 團、岡 司、山	電 車 歩 町 七 匹 の 羊 汽 飛 行 機 こ ぼ つ くり 律 動 「 切 り 紙 」 隨 意	つ っ わ し 電 車 水 前 寺 不 思 議 な 池 の 噴 水 同 上 桃 太 郎 同 上 水 鐵 砲 水 兵 「 律 動 」 「 畫 さ 方 」	ぶし ょう
ほ靴が たるなる 同同上	七匹の羊 汽 飛 行 機 こ ぼ つ くり 律 動 「 切 り 紙 」 隨 意	水 鐵 砲 水 兵 「 律 動 」 「 畫 さ 方 」	足にて保 なし手姆 不為員	「 畫 さ 方 」 運 動 會 「 切 り 紙 」 隨 意	「 畫 さ 方 」 隨 意	た

日六月六自 日十二月六至	日四月六至日卅月五自	日三十二 日八十二
計 時	る た ほ の月五月四 會 生 誕	育 保 外
々紀なは使六 の念く非用月 遊日は常し十 びを幾な苦 をな久ら心 ししぬを立 思く必要派 出を忘品し 深んてある かがある片 らし此時 む種のも迄	園ばべ深極 にせくくめ もた委なて 幼いしす 兒をくだ をして理け して飼由問 育な知が事 さしするあ しめるるの るこる	觀かの歌つ十登 察に魚とる三 の表、も自跡も 材現野畫然に 料が菜との遊 を出來果も景ぶ 多來物な色も くるのるによ あていろあり たあ／＼心う へら／＼も朝 たい。も晴眼 何亦市々々 何市場
時 計	植菊 の 苗	汽 車 令 部
	園 内	朝 市 場 二 十 三 聯 隊 跡
行ああ時 あ日計 あさん話 の旅		戦 日 本 海 海
あ日時 雨さん	笹 誕 の 生 舟 日	
びを同上 雨をほむ遊	同上 可愛 「律」 い兒	同上
「摺紙」 「時計」	「豆細工」 「螢籠」 「塗り繪」 「切り紙」 「ほたる」	「粘土」 「隨意」 「習の」 「既の」 「をを」 「任意」 「のを」 「任意」 「にな」 「さし」
		更 に 豫 定 變

日七十二月六自 日二 月七至	日十二月六自 日五廿月六至	日三十月六自 日八十月六至
會生誕の月七 六	顔 朝	蛙
ただしいの祝福をなし愉快に過ぎて たけの歌に遊戯に製作に出来得る たしめること迄も祝つてやり しをける事こゝ迄も祝つてやり 六七月に誕生の幼児が己れの祝ひ 六七月に誕生の幼児が己れの祝ひ	しく観見たい 二輪明三輪と咲く 飛び立つ程と幼 の甲斐あり嬉し 植えつけ置きし朝顔も日々の育て 植えつけ置きし朝顔も日々の育て	養なぬば興そ雨 はさし故に觸れ共 はしむる蛙と活動物愛護の念を ぬ、手を觸れ共 ば、手を觸れ共 興、味を觸れ共 そ、味を觸れ共 雨、味を觸れ共
蔬菜園	朝 雨 顔	花 花 化 鈴 む 田 園 園 虫 蛙 り 植 の 内 卵 つか
		社 琴 田 附 平 附 近 神 近 内 郎 内
浦島太郎	忠義な犬	白鳥お口様
つばめと子供	王取り朝顔	蛙
海水浴 玉ん	私のお庭	同
同 同	同 上	同 上
繩「飛び」 「律動」	兵隊「律動」	「競争」 輪取り
「草つなぎ」 「首飾」 「豆細工」	「摺紙」 「朝顔貼紙」 「切紙及貼付」 「朝顔貼紙」 「書方」 「寫生」	「粘土」 「隨意」 「麦わら」 「いちご籠」 「蛙籠」 「犬籠」
「習の飾」 「習の飾」 「習の飾」	「習の飾」 「習の飾」 「習の飾」	「習の飾」 「習の飾」 「習の飾」
「習の飾」 「習の飾」 「習の飾」	「習の飾」 「習の飾」 「習の飾」	「習の飾」 「習の飾」 「習の飾」

自七月初七日 至七月初八日	自七月初十日 至七月初六日	自七月初四日 至七月初九日
子の供の會	盆 ち	(會食) 夕 七
<p>幼兒相互の親しみも深くなりお友 達も出來て來た。ち細工、遊戯等も 歌ふ事、晝く事、ち細工、遊戯等も 非常な面白く、ち細工、遊戯等も つたに面白く、ち細工、遊戯等も つたに面白く、ち細工、遊戯等も 足と樂しさを味はしめ、園と父母 との親しみをも深くなさせたい</p>	<p>先祖の靈を祭る事は大切な事て又 美しき御馳走、皆我等の今日あ 心を盡し、御馳走、皆我等の今日あ るを感謝して、盆祭りをするの 幼兒にも此の念を養はしめたい。</p>	<p>七夕祭りに就ては面白い傳説があ る。天の川に對しては牽牛織女の も神秘的な興味をあたへてあ う又蓮の葉に浮き水上にて墨 り字を書けば上手になるとか りどりの短冊に字を記し、色 し眺めては此の上も記し、こ と満足な性情を養はしめたい の純な性を養はしめたい の純な性を養はしめたい</p>
金魚	打扇 提燈	星 ち供物
	町 庭	家庭
金魚と鮒	祖 先 猿の 人真似	織姫と 牛かいさ ん 雷と河童
子供の練習會	水鏡砲 子供の練習會	夕 日 夕 立 夕 魚のね
同上	同上	同上
團扇製作 金魚鉢 作「玩具」 金魚と 「切抜き」 金魚鉢	「摺紙」 蓮の花 「切り紙」 提燈 「商ひご と」	「粘土」 「室内装 飾」 七夕様 用 「習紙」 お供へ物 のを隨意 既習のもの
七月二十 日に子供 會をなす 父兄の出 席も多か つたので 印刷		

自九月五日 至九月十日	自九月一日 至九月三日	
虫捕り	(收穫菜蔬)出思しりあに中休お	
接うら郊中察園 してこのん外になれ飼 そのよなに出つて一育 生活この満かけて遊する 状態の中よふ思はれも も種々の中よふ思はれも 知らせられたに	もよにそす休 味ろ手は非つみ はこにの成常か せびにつ長なり たのけのの物成 のしらせて有様 いせ育てある も會しを觀 の食も察 のよるのさ こ成と び長共	長い休みもすんだ、久し振りにはな しいお友達に接して様々のおはな しにもなされるよるこびや汽車に乗つ 海にいしたる胸一つぱいに抱 たのいし事もあらう 澤山の出来事を胸一つぱいに抱 て来るよるこびを談話に描き方 表現せしめてたのしませたい
コホギ 口ホギ	瓜	豆
カオウマ カオウマ	ヘチマ	リキユウ
機織	フロウ	カボチャ
園内		ヒヨウ
園内		蔬菜園
新島太郎	蟻と鳩	子供の話 と保母の 話との交
兎の餅搗	虫捕	赤とんぼ
同上	同上	同上
自由畫	「摺紙」 「製作」 とんぼ	「海」 自由畫
	得ろ以なとや屋穫る熟つ全蔬た宛 たこ上し遊まごのしか部菜配を びの豫びつ野ててりが園一 をよ想等ご菜收お成すのし部	

自九月十九日至九月	自九月十九日 至九月十七日	
種 子 蒔 き	隨 兵	
秋の彼岸には春咲く様々の種子を 蒔き苗植をなす時種を蒔き及花壇 の間に蔬菜の手つて植めたい親し まし入る事に傳はしめたい親し 感ぜさせると共にその物の成長に興 を起させると共にその物の成長に興 味	藤崎八幡宮は當市の氏神として崇 拜される祭りの数日前から市内は お祭りの日とて幼兒の間にも非 常なよろこびと遊びのちのちも表 より受けられる象は遊びのちのちも表 現されるしめたい善導して敬神の念 を養はしめたい	
種 子 蒔 き	御八幡宮	ト ン ボ
大 根 園 内	隨 意	
お百姓さん	神功皇后 二百二十日のお話	隨兵に就
お百姓さん	秋の虫	
同 上	馬 上 「律」	
種 子 蒔 き	旗 「隨意畫」	「粘土」 ヒョウ タン
種 子 蒔 き	御幸式の表現	九月十三日 海沿の岸に大水が暴たす

日三月十日自 日八月十日至	日六十二月九自 日一月十至	日四十二
物果の秋	牛	
層實の々黄 よにも観幼色 ろも察兒に こ及びは熟 びぼ一觀して をし般察行 は秋に興 し手に熟味 め技す深園 るにるく内 よ種なる蜜 つ々る柑 ての園に 一果て日	くいを親味て牛 動遊及し深牛 物びぼむく小 愛にし事じ屋 護よそのによ訪 のつての生活乳 念をたの状態搾 を養はしみるも はせををらせ る一層深た察	牛に接する機 會の少い幼 兒をつれ 牛屋を訪問 する事はど んなに牛に 興
んき蜜ば栗林柿なぶ んかな橘しう	牛乳 小屋搾り	リチネア ヒケトス ツユネンヤ ビキ ブーモスシシー
市園 場庭	岡田牛	
太郎の笛	虎の明神	俵藤太
	父さん	あめんぼと
	同	同
	上	上
か「豆細工」 「切り紙」 「果物籠」 「なし」 「柿」 「林檎」 「塗り繪」 「いろく」 「果物の」 「粘土」	ての牛「書」 の表につ「方」 現い	「塗り繪」 牛牛牛 牛小屋製 作
		岡田牛乳 店から非 常に歡待 を受け

日四十月十至 日九十月十自	日七十月十自 日二十二月十至	日十月十自 日五十月十至
會動運	(會生誕月十・九・八)育保外郊	び遊屋物反
等にもろへも にこてう 導現はそ きははの 樂れど日 しくんつ くこなね 愉の時であ 快機らま に遊うつ 過遊遊幼 させ戯びの た競中 い争のよ	すをめ今 ご贈に邇 さつ誕は せて生八 た共會を いに開 祝ひきた 共にい 愉手製 快技た な製入 日作の を品た	ろのあこよをを蛭 こ一そ模のりなる陳 び部び傲買幼列時 もをし發的兒飾は 味はら展あ有達この はせさそも自も むたせてな及び然そ いな社なさびれの店 ほ會のれ反らめ衣 共質の生こ観服 同生の活つ察や のよ活のつ察か
運動會	有收米 有農柿大芋さ 様穫穫 様家の根 さま	吳服屋 唐人町
山崎校		
ひ三共あり運 つの願事會に	お地蔵様 米	権と平三惠 藏藏藏比 さんさん郎須
の既習のも		前の練習
現遊びの表自由畫	同上	はた織 「律」
塗り繪	果物かご 贈物製作 室内裝飾	す装陳反染 飾列物物 を及及作
	てなく出り子めな二郊 あく席父祭生し十外 つ残が兄に憎た日保 た念少の當たに育	

日四十月一十自 日九十月一十至	日七 月一十自 日七十月一十自	日一十三月十自 日 五 月一十至
ひ祝の三五七	菊	邸爵侯川細 拜參廟御
取お味經七 入宮を驗五 れた参もし三 たいりつての よりるる祝 観る事と云 察ものあへば を深てあり子 くある又供 し當非常は 遊當常はす び日興に	せいなほ 察し何 いなほ 陛下 の現 御紋 てあ ある 事 を 知 ら	熊てなし熊 本の昔をな の生をを本 んだんばし だせ細川 郷土侯 史に御 を幼廟 知い先 ら乍參 せらに たいよ は
りお宮詣	菊	跡野皇明朝路鐵天御 立治市道滿 の天場線宮廟
社代繼 參繼 拜神	園 庭	熊 途 細 本 中 川 城 城 邸
の富子紙 風子風 船さん船	太郎鼻高垣 の笛天狗根 遊名の菊	は御明加細 なし聖治藤藤川 の徳天清正正侯
宿がへ同 上	同 上	遊運 戲動 練會 習の
洋傘「摺紙」 「摺紙」 「ごじ風船」 「花結び方」 「お人形」 「製作」	「造花」 「塗り繪」 「さく」 「さく」 「さく」 「切り紙」 「花電車」 「菊」 「摺紙」	鳥隨隨紋九貼 帽子摺紙意土曜の紙 子摺紙意土曜の紙
	來が花園の菊 たよく出	除庭す豫縣侯 を園定に爵 をな掃變つ御 すす更き下

二十自 二十至	日八十二月一十至 日三 月二十 自	日一十二月一十自 日六十二月一十至
葉ち落	(誕の二十・一十) 會兄父・會生	んさ兔 (祭嘗新)育保外郊
多自然園紅 くの現内の葉 落象木のし 葉も観葉の にも察に振 観されよひ 察せるつて霜 させ郊幼さ降 たい外兒は來 拾いにはその頃 つてのにな	せり觀に幼每 た遊察可兒日 いびし愛いは兔接 を興味深おさんして 展さいう友達と云へば せよるさぎを材料に こびを味は	よず岡るせ兒蜜 ろ/山もたにも こ\にのいみ見 ばのててなあほか せのなさらドんか たい間にさせうグの いおせさこリのよ 互の事うし拾ひも 親によた生生活興 しみつた生活味あ みもてしを花
楓銀落常 杏葉盤木	龜 兔	みりど かん ぐ
熊本 城内	園 内	花岡山
の次 ゴム郎 球さん	白 兔 龜	新嘗祭 小坊主
もみち	同 上 同	同 上
同 上	同 上 上	とあまご
「書き方」 「表現」	贈装誕兔の餅の貼紙塗りと摺紙 の飾生會のつき「紙」り龜 物及の物製	自由書 みかんか ごんぐり 「製作」 どんぐり こま 粘土 自由
にてなす	園内のみ	
	た會との懇談 兄とやめ父 の立體 の生會 の飾及 の物製	十二月二日 に會を父 兄の會を したのな し生會取 りやめ父 の生會 の立體 の飾及 の物製

至日九月一自	日九十月五自 日四十月五至	日二十月二十自 日七十月二十至	日五月 日十月
の月正	び遊ひ商	び遊の市の歳	いろひ
等そだへおも てのらるたう 更まう子お幾 にまい、供のち 面に、其の月 白カルよ家内 くタル、のよ 遊ば、い、揃 せ双、子、は 正月、六、供、し 一層、追、気、は か福有正公下 る壽様月園河 た草のの原	ら越年年前 し、の末末週 いよ、の、大、の おろ、買、賣、製 正月、こ、ひ、作 の、の、の、品 た、を、の、を の、知、の、用 し、せ、び、を み、と、よ、に を、深、共、つ める、新、年、	び玩をりをはし年 の具ま等特觀暮 材製つにてに察の 料作よ遊具す賣 にをろこば興機出 するさびに又味會も し、し、浸、準、も、つ、種 め、る、も、備、し、ち、く、々 の、の、の、の、の、の、の 市、の、の、の、の、の、の の、の、の、の、の、の、の 遊、の、の、の、の、の、の	味た 深自然 い物 もは の、に の、手 に、技 した、に たい、ま、 事、に 用、ひ 興、
園家 内庭	園 内	園 町 内	園 内
ねずみ の 羽根 の 風	正月の お話 まりと 風	石の白 おもち つき	三匹 熊
同 上	同 上	同 上	同 上
由正月の自 表現	「書き方」 お金造り	店の装飾 及び陳列	「製作」 自由。落 葉にて

二月一至 二月一自	日六十月一自 日一十二月一至	日四十月一
び遊物乗	び遊便郵	び遊
<p>を遊もて興電車 びとある味車、 展にてるを、以汽車 さ及遊、電て車 せぼは電て車 集團してはは察の の全幼るで經物 喜幼がに驗は幼 びの更こし兒 をの力にのて兒 味はて汽題ゐが せ遊車材ののに たびののの</p>	<p>るのら使て郵 様ち物事來便 經子互にる屋 験にの接とさ を深ま通しは めて信ておん たい及か興と いのし引は正 のていて得は月 であ郵てに殊 る便はゐ種に知 に郵る々つを 對便所のても す局か郵ゐつ</p>	<p>楽しいものにする。</p>
<p>電切りふ停汽 車符番み車車</p>	<p>ポ 郵小切繪端手 ス配便使切端端書紙 ト達包手書書紙</p>	<p>あ 霜霜 ト双 ら雪氷と霜ンラ れ け柱 ブ 六</p>
<p>春竹 驛</p>	<p>園 家 途 郵 内 庭 中 便 局</p>	<p>「蓄音機」</p>
<p>猩々の 旅行</p>	<p>慾ばり猫</p>	<p>工夫</p>
<p>汽車 菓子 の</p>	<p>ポ ス ト</p>	<p>「律」</p>
<p>飛行機</p>	<p>郵便遊び</p>	<p>まりと 風船</p>
<p>汽停積お切 車車木金符 場「」紙</p>	<p>「積木」 郵便局 「摺紙」 「状紙」 「織紙」 「ポスト」 「塗り繪」 「書き方」 「繪葉書」</p>	<p>「律」</p>

月三自 月三至	日五月三自 日十月三至	日七十二月二自 日三月三至	日十二月二自 日五月二至
外 郊	紀陸 誕一 念軍 生二 日軍 會三	り 祭 雛	び遊屋具玩
の岡た暖 景山く日 色へなる和 は登る親て 皆春の見しある の渡すいど よろ山友と こ々達こ びを姿一 を表、所 して田に 畑花け	暖く唱祝一 い遊歌ふ月、 親び遊遊爲二 しみ菓等賜、 を子各自り三 増食得物月 したいべて意の製 い幼も作した 兒兒又子 相相而談 互互の白話	な共にも家雛 ほよも庭祭 國努雛のり 粹力て段の古 保せ雛のい 存し祭の仕 念のよを備 をこ行に び愉ひ装 を感快飾 せ遊に しぶの めと手	念て作へ子 や玩しら供 商具園にと 法の屋に のの備も 一商へは 端ごある をつこの 會得せし 得せし しめる のの 觀へ
麥晴か山 の芽ら上 見上		雛 段 桃の 花	玩具 種々の
山花 崎岡 小		千 徳 屋	園家見子聖 内庭の市太
ひ ば り	戦七明 様 争八治 の 談年三十 客	お 友 達 春 よ 來 い	聖 秀 の 徳 雄 御 太 さん 話 子 具
同 上	別 修誕 れの了生 の歌式日	同	ひ ま 玩 祭 な が 具 祭 祭 角 箱
同 上		同 上	同 上
整手 理工 帖の	玩お 賜 人製り 具形作物	お 裝 製 供 飾 作 物 成 成 内 裏 様	玩具 組摺切 細り製 土工紙紙作
		會に三致なへ節人ア 開は月しおて句形メ 催子三た祭販にをリ 供日いをか加おカ	

日六十二月三	日九十月三自 日四十二月三至	日二十 日七十
式了修	備準の式了修	育保
	<p>修了の日は近まつて來た其の日の 爲の準備に裝飾に種々の製作に働 かせて創作工夫の念を養ふ</p>	<p>遊ぶ其の自然の景色の中に充分に 遊ばせのびのびとした氣持にする やがて入學すべき小學校を參觀し その様子を知らせ期待してゐる興 味を更に深めたい。</p>
	種子蒔花	草木の すみれ あやかし
	蔬菜園 地藏様	観
話談の長園	多喜子の 夢	
修了の歌 別れの歌 君が代	子供の會同 練習	
	同上	
	「自由製 作」 帽の 「書き方」 隨意	「書き方」 景色